「プロジェクト卍 白鳳伽藍を再建せよ」の巻

古都である奈良・京都には多くの寺院が存在しています。どこも侘び寂びの風情をもった由緒あるところが多いのですが、奈良・西ノ京には、この侘び寂びとはちょっと違う、何か勢いを感じさせるような雰囲気をもつ寺院が存在します。それは薬師寺です。もともとは持統天皇の病気平癒を祈願するために建てられた寺院で、「竜宮造り」と呼ばれる裳階のある金堂の前に東西二塔が建つ壮麗な伽藍をもっていました。しかし、その華麗な堂塔群は戦乱など何度かの火災にあって次々と焼失してしまい、創建当時からの建造物は東塔だけになってしまったのです。本尊である薬師如来も被災し、その後はみすぼらしい仮金堂で雨露をしのぐという不遇な時期が長く続きました。

昭和 42 年、住職となった管主はこのような状態を嘆き、焼失した金堂の復興を決意しました。しかし、このような大プロジェクトを行うには、莫大な資金が必要です。今でも各地の寺院や文化遺産などで復興しようという機運が高まりはしますが、この現実の壁に阻まれて頓挫してしまうことも少なくありません。では、

薬師寺は資金調達のためにどのような対策を考えたのでしょうか。それは、「写経勧進」という方法でした。一般の人々が般若心経を写経し、その納経料・永代供養料を浄財として寄進するという形の「百万巻写経勧進」を考案・実行したのです。ただ、この写経勧進を始めたとはいえ、そうそう簡単に復興のための資金が集まるわけではありません。今でこそインターネットでのクラウドファンディングなどという手段はありますが（実際に法隆寺では、コロナ禍での参拝者減少に伴う維持管理費確保のためのクラウドファンディングで、当初の目標金額の 2000 万円に対して、一週間でなんと 1 億 5700 万円を集めた実績があります。）、当時はそのような方法は当然存在せず、管主は長い期間日本全国を巡り巡って写経勧進を続けました。その結果、ついに昭和 51 年（1976）、念願の金堂再建が叶ったのです。

その後も写経勧進は続き、昭和 56 年（1981）には西塔が、さらに中門、回廊、玄奘三蔵院伽藍などが建てられ、平成 15 年（2003）には大講堂が、平成 29 年（2017）には食堂（じきどう）が再建され、創建当時の壮麗な白鳳伽藍がよみがえったのです。また、東塔も平成 12 年（2009）から令和 3 年（2021）2 月まで、実に 12 年をかけて塔全体の解体修理が行われ、明治時代に渡来した米国東洋美術研究家のアーネスト・フェノロサをして「凍れる音楽」と言わしめた美しい姿が戻りました。

薬師寺では今でも、道場を建てるなどして写経勧進が続いており、伽藍の復興・整備は現在進行形となっています。修学旅行生に対する法話も、以前は「青空法話」と呼ばれ、屋外で朝礼台のような壇の上から行っていましたが、今では境内にある東僧坊と呼ばれる施設内で行えるなど、伽藍・施設の充実には目を見張るものがあります。そんな状況なので、薬師寺は他の寺社のもつ風情とはちょっと違った、勢いのある雰囲気を醸し出しています。

なお、伽藍復興で再建された西塔ですが、高さや屋根の軒の反りなど、東塔とは少し容姿が異なっています。これは自重による地盤沈下や木材の収縮などを考え、500 年後に同じ高さ、1000 年後に同じ屋根の反りになることを見越して作られているということです。このような工人たちの先見の明は、復興が一過性のものではなく、永続的であることを感じさせます。白鳳時代の荘厳で華麗な伽藍は、いまもなお復興を続けています。